B03 キノコ食昆虫の群集構造

都野展子（長崎大学・熱研・生物環境）

Community structure of mycophagous insects

Tuno, N.

キノコ食昆虫群集は、硬質・長命の菌種を摂食する鞘翅目群集と、軟質・短命の菌種を摂食する双翅目群集に大別され、論じられるテーマも異なっている。より包括的な研究が必要でありそれには、硬質・長命菌及び軟質・短命菌の双方を利用するショウジョウバエ類は格好の材料である。キノコのどのような特色がショウジョウバエの群集構造に反映されているか調べた結果、群集構造はキノコの硬さ、次に発生量／期間によって規定されていた。この結果は、昆虫の形質間の可塑性の差（系統発生的制約）が群集構造を階層的に規定することを示唆している。

B04 大阪湾の廃棄物処分地で腐肉トラップに捕獲されたハエ類今井長兵衛[○]、夏原由博、山崎一夫（大阪市立環境科学研究所）

Fly fauna bait-trapped at a waste disposal site in Osaka Bay

Chobei Imai, Yoshihiro Natuhara and Kazuo Yamazaki (Osaka City Institute of Public Health and Environmental Sciences)

大阪湾の廃棄物処分地で 1988～1997 年にハエ類の生息を調べた。毎年 4～11 月に月 1 回、5 個の腐肉トラップを 10:45～14:15 の間の 3 時間設置し、捕集したハエの種別個体数を数えた。全部で 18 種 21466 個体を捕集した。ヒロズキンバエが最も多く、16628 個体(全体の 77.5%)、以下、オビキンバエの 1608 個体(7.5%)、イエバエの 1538 個体(7.2%)、ケブカクロバエの 596 個体(2.8%)、ミドリキンバエの 320 個体(1.5%)と続いた。森林性の種ではホホグロオビキンバエ(28 個体 0.13%)やヒメクロバエ(7 個体 0.03%)が少なく、環境条件を良く反映していた。ごみからの発生が最も懸念されるイエバエは、1992 年 7 月と 1993 年 6 月に捕集数が 200～300 と比較的大きな値を示したが、それ以外は 70 個体以下で推移し、とくに 1995 年以後はほとんど捕集されなかった。ごみ斜面への覆土を主体とする防除作業の効果である。